

父との関係

それは本当に驚いた出来事だったのです。青天の霹靂とはこのことを言うのでしょうか？ 五〇年生きてきて、こんなに驚いたのは初めてでした。

この家を出て、上京していた息子の幹夫が久しぶりに帰ってきたのです。約二年ぶりでした。私が知っている幹夫には特に変なところはありませんでした。

ところが先日、帰ってきた息子を見たとき、私は暫く動けずにいたのです。あまりの驚愕に、何がなんだか分からなくなってしまいました。

一週間前に帰ってきたのですが、玄関で「ただいま」と言った息子が……なんと、この上なく綺麗になっていたのです。綺麗というのは美人という意味です。

息子だと思って、玄関まで出ていった私ですが、そこに立っていたのは、息子ではなく、若い女性だったのです。私は一瞬、息子が彼女を連れて来たのだと思いました。しかし彼女が立っているだけで息子の姿はありません。

外にいるのだろうか、女性の後ろを覗いてみましたが、どこにも見当たらないのです。するとその女性が言いました。「ただいま、お父さん」と。

そう言われても訳が分からず、見知らぬ女性に「お父さん」と言われてもピンときません。「お父さん、幹夫だよ」

と女性は言いました。そう言われて、余計に状況が分からなくなったのです。息子の名前を言ったそのお嬢さんは、笑顔を浮かべて私を見ているではないですか。

「あ、あのう、どちら様で、しょうか？」

状況が呑み込めないまま私は言いました。

「だから幹夫だって。とにかく説明するから上がるね」

その女性は勝手にスリッパを履いて上がり込み、居間に入っていったのです。迷うことなく居間のソファに座った女性は「そこに座って」と私に言いました。

言われた通りに私は女性の向かい側に腰を下ろしたのです。女性の顔をよく見ると、どことなく息子の面影がありました。しかしまさか……と思い、そんなはずはないだろうと思っていました。

「驚かせてごめんなさい。私ね、女の子になったの」

彼女は恥ずかしそうに、そして思い切ったように、そう言いました。

「ええ？」

「だから、息子の幹夫は性転換して女の子になったのよ」

息子は、というか、その女の子はどういうことなのかを順を追って説明してくれました。

「お父さん、性同一性障害って知ってるよね？」

「ああ、まあ……聞いたことはあるが……」

「私ね、小さい頃からそれだったの」

「ええ！ ミキ、お前……」

話を聞くと、幹夫は小学校の頃から自分の性に違和感を覚えていたそうでした。好きになるのはクラスの男の子だったり、男の先生だったりしたということです。

そのことを誰にも相談できずに一人で苦しんでいたらしく、とにかく高校を卒業して、一人暮らしをするまで我慢しようと決めていたそうなんです。

高卒と同時に一応企業に就職はしたものの、どうしても女の子になりたいという気持ちが捨て切れずに、一年足らずで会社を辞めてしまって、身も心も女性になるべく、独り暮らしをするために単身東京へ行き、性転換することを考え始めたというのです。

息子、いや娘は涙ながらにそう語ってくれました。

「ごめんね、お父さん……」

私は言葉を失いました。なんと言っているのか分からずに、ただ呆然とするだけでした。とにかく頭の中がぐちゃぐちゃで、何をどう考えればいいのか、あまりにも突然すぎて、狼狽^{うろた}えてしまったのです。

「もしお父さんが、こんな息子は受け入れられないって言うなら、二度とこの家には戻りません。親子の縁を切ってもらって結構です」

「ミキ……」

私は普段から幹夫のことを省略して「ミキ」と呼んでいました。

「本当はここへ帰ってこようか、どうしようか迷ったの。でも、このままじゃいけないと思って、一度お父さんと腹を割って、ゆっくり話さなきゃいけないと思って帰ることにしたの」

そう言われても、もう女性になってしまっているのだから、私にはどうすることも出来ません。せめて、そうなる前に相談して欲しかったのです。

男から女に変わるということは簡単なことではありません。世間の目もありますし、周りの状況や、親戚筋もあることですから、私にもどうすることもできません。本当に困ったと思いました。息子の気持ちも理解してやらなければと思いました。

「そんなことしてお前……これからどうするんだ？」

「そのことはまたあとで話します。今はちゃんと仕事してお金稼いでるから」

幹夫は完全な女言葉で話すようになっていました。それには私も慣れないせいか、戸惑いを覚えました。女性になって男言葉で話すのも違和感を覚えるでしょう。幹夫の話し方には、そのうち慣れるとして、とにかく私は現状を飲み込むように努力しました。

そういうのは昔は「オカマ」と一括りにしていましたが、今では女装男子とかニューハーフとかいう確立したジャンルがあるらしいのです。世間的にもかなりオープンになってきました。それぐらいの知識は私にもあります。

しかし、まさか我が子が……。